

私がこの研修に参加したのは中国の文化や歴史が好きということと、春休みは時間があるため何かしたいなという簡単な動機からだった。初日、少しの不安と期待を抱きながら飛行機に乗り、ものの3時間ほどで台湾に到着。着いてみると日本人のような人が多くいた。しかし、彼らの発している言葉を聞いた瞬間、そこは外国なのだと実感した。彼らが気軽に話しかけてくれても全然聞き取れない。己の無力さを痛感した。

私が通った大学は台北市内にある理系の大学だった。基本的に午前中は授業があって、午後からは自由時間だった。授業に関しては先生がゆっくりと聞き取りやすいように話してくれたので、それほど理解に苦労はしなかった。先生が親切な方々で本当に良かった。そして、この研修では家族制度というものがあり、台湾の学生数人が日本の学生2人を研修期間中お世話してくれるというものだった。だから、基本的には家族と一緒に行動することになる。午後の自由時間には家族やその友達などと一緒にご飯を食べたり、台北101へ行ったり、マクドナルドで話したりと色々なことをした。彼らは熱心に日本語を学んでいたのもので日本語を教え、中国語を教えてもらうという双方にとってメリットがあった。また、最初の頃はお店で何かを注文するのも怖くてできなかった。しかし、慣れてくると一人で注文ができるようになった。お昼に一人で入った店で炒飯を注文して違うものが出てきたときはさすがに驚いた。さらに台湾は夜市で有名だ。夜市では一番大きな士林夜市に行き、ちょっと臭い豆腐や果物ジュースなどを堪能した。夜市は日本の花火や祭りのときの出店のような感じで毎日賑わっていた。

台湾に来て印象的に感じたことは温かい人が多いということだった。確かにバイクが多く横断歩道を渡っていてもすれすれのところを通っていくので何回か危ない目にあったりもした。しかし、例えばバスや電車の中では日本よりも老人に席を譲る光景が比べものにならないほど多く見られた。他にも、お店の中では店員さんが普通に話しかけて来てくれたりと居心地良いものだった。こうして気候だけでなく人の温かさも感じる事ができた。

帰国の日が近づくにつれて胸が苦しくなっていた。いつまでも台湾にいて友人と離れたくない、そう思った。しかし、出会いがあれば当然別れはある。出会った瞬間からいつか別れることが決定する。人生の時間は有限である。いつまでも当たり前の日々が続くわけではない。そう思うと人生を懸命に生きることができる。

当初長いと感じたこの研修も、終わってみれば早いものだった。この研修で中国語がペラペラになったわけではないが約1か月外国に住むというのは貴重な経験である。もともと中国語を学びたかったが、この研修を通じてより一層中国語が好きになった。もっと学びたい、そしてもっと話せるようになって台湾の大事な友人ともっと愉快地に会話したい、それが私のこれからの中国語学習の原動力である。

